

# 大学カリキュラムにおける World Englishes

児島 千珠代

---

## Abstract:

### “World Englishes” as a subject in the university curriculum

The idea of World Englishes has been gaining general acceptance since the 1980s. This way of thinking regards English as a means of communication. The principle is that not only English of native speakers but that of non-native speakers should be valued as a means of expression of the speaker's identity. Some studies report that Japanese students acquired more positive attitudes as non-native speakers after getting information about World Englishes. A “World Englishes” class was started as an optional subject in the Department of Global Citizenship Studies in Seisen University in 2016. Questionnaires completed by the students who attended the “World Englishes” class highlighted the importance of this subject for enhancing the university curriculum.

---

## 要 旨 :

清泉女子大学では、2016年度に新たに「World Englishes」という科目が地球市民学科の選択科目として設置された。

World Englishes とは 1980 年代頃から出てきた考え方で、イギリスやアメリカの英語だけが英語ではなく、それぞれの国の特徴のある英語を、お互いに理解し合えるように使っていこうという考え方である。日本人英語学習者がこの考えを知ることによって、英語学習に関する考えに影響を与え、non-native speakers として積極的な態度で英語を使うように変化する可能性が報告されている。

2016 年度に「World Englishes」を履修した学生にアンケート調査を実施した結果、大学カリキュラムにおける「World Englishes」という科目の意義や問題点が明らかになった。

## キーワード :

World Englishes, learner beliefs

## 1. はじめに

清泉女子大学では 2016 年度に、地球市民学科の選択科目として「World Englishes」が新たに設置された。この科目のテーマとして「英語が世界のどのような国で、どのような人々によって使われているかを学び、World Englishes という考え方を理解する」ということが挙げられる。また、学生が「日本人として、堂々と英語を使えるようになるための英語力と積極的な態度を身につける」ことを目標としている。このように、一般的な英語科目とは、やや異なる到達点を目指した科目である。

新たに設置された科目であるため、授業に対する学生の反応や、科目としての問題点を把握する必要があると考え、履修した学生を対象にアンケート調査を実施した。

本稿では、World Englishes と learner beliefs に関連した先行研究を概観した上で、アンケート調査の結果を提示し、考察する。

## 2. 先行研究

### 2.1. World Englishes

世界で英語が使われている状況を Crystal (2003) は、アメリカの言語学者 Braj Kachru の提示した三つの同心円モデル (inner circle, extended circle, expanding circle) で説明している。すなわち、英語を母国語としている国、第二言語としている国、外国語として教えられている国、の三つのグループである。世界の人口約 70 億人のうち、英語を母国語とする人の 4 倍にあたる約 16 億の人々は、英語を第二言語または外国語として勉強したり、使ったりしている。

このような背景から、1980 年代頃 World Englishes という考え方が出てきた。これは、イギリスやアメリカの英語だけが英語ではなく、それぞれの国の特徴のある英語を、お互いに理解し合えるように使っていくのが良いという考え方である。

英語は、世界の様々の場面で国際語として使われるので、時には native speakers が不在で、non-native speakers だけで使われることもある (Jenkins 2003)。そのような場合、英語はイギリス文化やアメリカ文化に縛られることなく、話し手である non-native speakers の文化を表現するのである。こ

のように、国際語としての英語は、それぞれの国の特徴を持つべきだと Crystal (2003) は主張する。World Englishes とは、国際的なコミュニケーションの手段として使用される英語の種類であり、それぞれの地域の特徴を持つ英語と定義されている。

Graddol (2006) は、EFL (English as a foreign language: 外国語としての英語) が、native speakers の文化や社会を学ぶことを重要視しすぎていると批判している。すなわち、英語学習者は、native speakers の社会から受け入れられるように努力したり、native speakers の英語こそが正しいのだと尊重したりする。しかし今や、「英語の所有者」は、native speakers から、non-native speakers の国際社会へと移ってきている (Norrish 2008) のである。

英語が外国語として教えられている国では、学習者は正確な文法と native speakers のような発音を習得することを要求される。学習者が、もし native speakers の基準で評価されたら、どんなに熟達した学習者でも、失敗者とみなされるだろう (Graddol 2006)。

英語は共通語として世界中に広まっているので、ある国の人々は、native speakers と同じような英語の使い方をしたくないかもしれない (Crystal 2003)。英語が世界の共通語になった現在、Crystal は「もはや英語は誰のものでもない、むしろ、英語を学んだすべての人達のものだ」と述べている。native speakers と non-native speakers の違いなど、もうほとんどないのである (Kirkpatrick 2007)。

Crystal や Kirkpatrick の主張にもかかわらず、英語教育の現場では「native speakers が最高の教師である」という考え方が優勢である (Canagarajah 1999)。しかし、Canagarajah は「non-native speakers の教師は、教育学的にも言語学的にも優れている」と指摘する。

英語教育においては今、世界共通語としての英語が学ばれ、使われている現状に対応しなければならない。英語を取り巻く状況は、以前とはまったく異なってきているため、英語教育にかかわる関係者、すなわち、学習者、教師、政府機関、教科書出版社などは、しっかりとその状況を見極める態度を持つべきである (Graddol 2006)。

## 2.2. Learner beliefs

応用言語学において、学習者が言語学習について持っている考えや思いこみのことを *learner beliefs* と呼び、これは学習者の個人差の一つである (Ellis 1994)。学習者が持っている *learner beliefs* は、学習結果にも影響を与える。なぜならば、*learner beliefs* は、どのように学習していくかという学習方略を決定し、それが学習結果につながるからである。

どのような英語を目標とするか、また、自分自身の英語をどう捉えるかということも、*learner beliefs* に含まれる。

*World Englishes* という考え方が広まってきているが、多くの日本人英語学習者が目標とする英語は、イギリス英語かアメリカ英語であり、その他の英語は正しくないと考えがちである。このように考えると、英語学習には不利に働く。なぜならば、自分の英語がまだ標準的なレベルに達していないと思うと、英語を使うことをためらうからである (Kojima 2015)。

高校生を対象とした調査では、「私は日本人なまりの英語なので、自信がなくて英語を話せない」という生徒の声があった。*World Englishes* について学んだ後、再び調査してみると、「日本人なまりの英語は、そんなに恥ずかしいことではないとわかった」「それぞれの国の特徴がある英語があってもいいのだと思うようになった」という考え (*learner beliefs*) に変化したことが確認された (Kojima 2005)。この調査対象の高校生は、*non-native speakers* としての自覚を持って、英語に向き合う姿勢を持つようになったのである。

外国語学習について誤った考えや思い込みをしていると、学習に悪影響を与え、進歩を妨げることもある (Mantle-Bromley 1995)。学習者は、英語が世界共通語として、*native speakers* の4倍にあたる約16億人の *non-native speakers* にも使われている状況を知ることによって、英語学習に前向きな考えを持てる可能性がある。

## 3. 調査

### 3.1. 調査授業の概要

2016年度に新設された科目「World Englishes」は、地球市民学科の選択科目で、授業日は後期15回である。この15回を、地球市民学科の4人の

教員が担当した。筆者はコーディネーターとして、1回目、10回目、15回目の3回の授業担当であった。1回目は、World Englishes という考え方が、この研究分野でどのように生まれ、論議されているかを紹介し、世界では native speakers の約4倍の数の non-native speakers が、英語を使ったり、勉強したりしているということを説明した。10回目は World Englishes 関連の英語の文献の一部を説明した上で、アジア圏の英語のリスニングをした。15回目はイギリスで録画された駅の放送、学会での英語、テレビの天気予報をリスニングして、これらについてグループワークをした。

他の3人の教員は、それぞれが連続4回の授業担当で、アジアやアフリカの英語に触れたり、またアメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語の違いについて教えたり、実際にスカイプで現地の人と英語で会話をしたりする授業を行った。15回の授業を通して、教員側から学生に対して「なまり」や「なまる」というマイナスイメージを与えるような表現は使用しなかった。

当該授業の目指す World Englishes の定義は、「それぞれの国の特徴のある英語を、お互いに理解し合えるように使う国際語としての英語」である。

### 3.2. 調査対象と調査方法

地球市民学科の英語選択科目は、英語能力試験の点数によってレベルが4段階に分けられており、「World Englishes」はレベルの一番低い「レベル1」の分類に置かれている。

また、「World Englishes」は、教職課程の教科に関する科目であるため、教職課程履修者は、取得免許の種類により、学科に関係なく履修し単位を取得できる科目である。2016年度、地球市民学科の学生以外で履修したのは、スペイン語スペイン文学科の1名であった。

アンケート調査は2回行った。1回目は、まだ World Englishes について説明する前の1回目の授業の最初に、2回目は、15回目の授業の最後に行った。質問項目は、1回目のアンケートが8項目、2回目のアンケートが9項目あり、質問の2～8は同じ内容である（付録1、付録2 参照）。

調査対象は、それぞれの授業に出席した学生である。1回目のアンケート（9月29日実施）では30名、2回目のアンケート（1月26日実施）では

27名から回答が得られた。

### 3.3 調査結果

アンケート調査の結果について、質問 1～3 への回答を以下にそれぞれ示した。次に、質問 4～8 では、2 回行ったアンケートへの回答を比較し、変化の有無を確認した。まず、1 回目のアンケートの質問 1～3 への回答は、次の通りであった。

質問 1「World Englishes を知っていますか」には、47%の学生が「知っている」と答え、53%の学生が「知らない」と答えた。「知っている」と答えた学生は、「世界共通語の英語だが、国や地域によって、なまりがあること」「世界には様々な英語の種類があるということ」など、ある程度の知識を持っていた。

質問 2「この World Englishes の科目をとりたいと思った理由」は、約 52%の学生が「内容に興味があったから」と答えている一方で、約 40%の学生が「レベル 1 で、レベルが低いから」と答え、「英語が苦手で、単位をとるためには、低いレベルがいいと思ったから」との回答であった。約 8%の「その他」は、「4 人の先生による授業が面白そうと思った」という理由を挙げていた。

内容に興味のある学生は、英語が好きで得意である確率が高い。この英語能力の高いグループと、英語が苦手で低いレベルを求めているグループが、クラスを二分している状況は、どちらのグループにとっても、不都合や欲求不満を感じる可能性がある。

質問 3「World Englishes の科目で期待していること、やりたいこと」に対する答えの大半は、「World Englishes の基礎的なことから学びたい」「各国の英語の特徴などを知りたい」「様々な国や地域の英語に触れること」「英語が母国語でない国では、英語がどのように話されているのかを知りたい」という内容だったが、一方で「頑張るので、単位がほしいです」「英語が苦手でも、ついていけるようにしてほしい」「できれば日本語で授業してほしい」という要望も書かれていた。

これらの記述からも、「内容に興味があり英語の得意なグループ」と「英語が苦手で、低いレベルの科目で単位をとりたいグループ」の二つのグル

ープで構成されているクラスだということが明らかである。

質問 4～8 の 5 項目は、2 回行ったアンケートにおいて同じ質問項目である。この 2 回の回答を比較することによって、授業を受ける前と、15 回の授業を受けた後の、学生の考え方の変化を探ってみたい。1 回目のアンケート記入者は 30 人、2 回目は 27 人と、完全に一致はしていないが、グループとしての変化は浮かび上がるはずである。

1 回目のアンケートは授業を受ける前なので ”Before”、2 回目のアンケートは 15 回の授業の最後なので ”After” として、比較する。記入していない学生や、両方に記入した学生もいたので、合計が 100%にならない場合がある。また、学生の記述はすべて原文のままである。学生の多くが、**native speakers** のことを「ネイティブ」と表現するのは、中学・高校時代の先生がよく使っていた言葉であるため、その影響を受けたと考えられる。

表 1 アメリカ人やイギリス人のようなネイティブの英語を使いたい

|               | はい         | いいえ       |
|---------------|------------|-----------|
| Before (30 人) | 26 人 (87%) | 3 人 (10%) |
| After (27 人)  | 22 人 (81%) | 5 人 (19%) |

表 1 で Before に書かれていた、アメリカ人やイギリス人のようなネイティブの英語を使いたい理由は「カッコいいから」「ネイティブと流ちょうに会話できるようになりたいから」「誰もが聞き取れる英語でコミュニケーションが図れるから」などであった。「いいえ」と答えた理由は「そこまでのレベルに達していないから」「相手に伝われば、どんな英語でも良いと思う」であった。

Before と After で大きな変化は見られなかった。After に書かれていた「はい」の理由として「世界的な基準は、まだまだこの 2 つの英語なので」「自分はキレイな発音でいたいです」「良い仕事につけるから。将来のため」「やはり、あの流ちょうな発音に憧れます」と、**native speakers** の英語に憧れる気持ちを表現している。After に書かれていた「いいえ」の理由は「ネイティブ英語じゃなくても、伝われば良いと思うから」「訛りがあっても通じるし、私も訛りがある英語を聞いて理解できるから」と **non-native** の

英語に理解を示している。

表2 日本人なまりの英語を使いたくない

|              | はい        | いいえ       | その他     |
|--------------|-----------|-----------|---------|
| Before (30人) | 20人 (67%) | 8人 (27%)  | 2人 (7%) |
| After (27人)  | 14人 (52%) | 11人 (41%) | 2人 (7%) |

表2 Beforeの「はい」の理由は「かっこ悪いから」「海外で理解してもらえない時が多いから」で、「いいえ」の理由は「日本人なまりでも伝わればいから」「発音がなまってしまうのは仕方ないと思うから」であった。「その他」では「絶対使いたくない!とは思わないけれど、英語を話す上で、日本人なまりが出てしまうのは仕方ないと思う」という考えである。

Afterでは、15%程度「はい」が減り、「いいえ」が増えている。「はい」の理由は、Beforeとほぼ同じだったが、「いいえ」の理由で「日本人なまりの英語を恥ずべきこととは思わなくなった。なぜなら、他の国の人が話す英語をこの授業内で聞いた時、自信を持って話しているように見えたから」「日本人なまりの英語も、一つの英語の特徴だと思うから」という考えが出てきた。これは、この授業を受けたことによる変化だと考えられる。

表3 自分の英語が日本人なまりだと思うと自信をなくし使いにくい

|              | はい        | いいえ       |
|--------------|-----------|-----------|
| Before (30人) | 22人 (73%) | 8人 (27%)  |
| After (27人)  | 8人 (30%)  | 19人 (70%) |

表3では、「はい」が43%減り、「いいえ」が43%増えるという、大きな変化が見られた。Beforeの「はい」の理由では「伝わらないし、恥ずかしいし、劣等感があるから」「伝わらないと傷つく。日本人なまりがあるという先入観から、話すことに抵抗を持ってしまう」という内容が多いが、Afterの「いいえ」の理由は「今までは、少しネイティブと発音が違うことに抵抗があり、使いにくかったが、この授業を通して、日本人なまりの

英語でも恥ずかしいものではないと思ったため」「この授業を通して、伝えようとする力の大切さを知ったため」「この授業で、なまった英語でも、相手に伝えようとする意志が必要なのだと思うから」と、この授業によって、大きく考え方が変わったことを示している。これは、英語についての考え方、つまり *beliefs* の変化である。

表 4 自分の英語が日本人なまりでも自信を持って使うべきだと思う

|              | はい        | いいえ       | その他     |
|--------------|-----------|-----------|---------|
| Before (30人) | 16人 (53%) | 12人 (40%) | 2人 (7%) |
| After (27人)  | 21人 (78%) | 6人 (22%)  | 0人 (0%) |

表 4 では、「はい」が 25% 増え、「いいえ」が 18% 減った。Before の「はい」では、「気にしていたら、いつまでも話せないと思う」とあり、「いいえ」では、「やはり聞いていて、ネイティブに近いほうがカッコイイと感じます」「伝わらない英語は意味がない」などの記入があった。

After の「いいえ」では「なまりにマイナスのイメージがあるから」「日本人なまりでは、全然通じる英語ではないので」と、Before の記述内容に近かったが、「はい」では、「なまり英語は世界中にあるし、自信をなくすべきではない」「他国の人は、なまっけていても堂々としているし、日本語を話す外国人もなまっけているから」「上手、下手ではなく、自信を持ち堂々とするのが一番であると思うから」「伝えようとする意志が大切であると考える」「自分たちの英語も、一つの英語であるから」「周りの人は、自信を持って英語を発音しているので、通じれば良い、という認識を持ちたい」と前向きな考えが示されている。

表 5 アメリカ英語やイギリス英語以外のさまざまな英語を使うべきだ

|              | はい        | いいえ       | その他     |
|--------------|-----------|-----------|---------|
| Before (30人) | 8人 (27%)  | 21人 (70%) | 1人 (3%) |
| After (27人)  | 11人 (41%) | 15人 (56%) | 1人 (3%) |

表 5 では、「はい」が 14% 増え、「いいえ」が 14% 減っている。Before

の「はい」では、「それぞれの英語があるのは良いことだと思う」と理解は示しながらも、「目標とするのは、ネイティブの英語である」としている。「いいえ」では、「なるべくアメリカ英語やイギリス英語に近づけていくべき」「みんなに伝わる英語を使うべき」という考えである。

After の「はい」では「その国に合った英語を話すことで、コミュニケーションがより円滑に進むと思うから」「型やなまりを気にせずを使うことも良いとおもうようになったから」と考えの変化を示している。「いいえ」では、「使うべきではないが、英語の一つとして知っておくべきだと思う」という理解が示された。

これまで見てきた結果の中で、Before と After で一番大きな変化があったのは、「自分の英語が日本人なまりだと思うと自信をなくし使いにくい」という気持ちが減少したことである。

このような「non-native speakers」として自信を持って英語を使っていこうとする beliefs や態度は、英語を学習する際に有利に働く。なぜならば、積極的に英語を使用することは、英語力向上につながるからである。

授業を受けた後に、英語について考えたことを、学生は次のように記述している。

フィリピンに行って、スペインなまりの英語に触れた時、「全然わからない。もっとちゃんと言ってほしい」と思いました。しかし「ちゃんと」って何だろう？と、先生の話聞いて思いました。その考えがダメだな、と。

*World Englishes* の授業、改めて考えさせられる点がいくつもあり、*English learner* として意識し続ける点を忘れずに、“英語”を勉強していきたいです。

学者によって、ネイティブと第2言語と学習言語の図の表し方が違って、面白いと思った。

先生が実際に撮影されたビデオを見て、内容を推測したり、日本と比較し

たりすることが楽しかった。あまりの日本との違いに驚いた。

日本にずっといると、当たり前じゃないことを当たり前だと思っていて、私たちの思う普通は、普通じゃないことが多いから、その点でこの授業は、そうじゃないことを気づくきっかけになったし、思いこみが実は違ったと知れたので良かった。

15 回目の授業で行ったアンケートの質問 1「この World Englishes の科目を履修して良かったですか」の回答は、27 人中 27 人全員が「はい」と答えた。それについての学生の記述は、次のとおりである。

英語に対する考えが少し変わった。

今までは、完ぺきにネイティブの英語を習得したいと思っていた。

今まで英語についてアメリカ英語とイギリス英語くらいだと思っていたが、第二言語として使われる国々のなまりを学ぶことができて良かった。

ふだんの英語の授業でやる文法、読解とは違う授業だったので、英語を学ぶ上で何が大事なのか、英語を話す上で何が大事のかなどが学べた。

アンケートの質問 9 の「友達にこの科目をとることをおすすめしますか」には、記入のなかった 4 人を除いて、記入した 23 人全員が「友達にすすめる」と回答した。それについて、学生は次のように記述している。

英語を話すことの勇気を持てた気がするため、友達にぜひすすめたい。

英語に対する考え方が変わってポジティブなものになるから、すすめる。

レベル 4 の人もいたせいか、思ったより内容が難しく感じた。レベル 2 以上の人にすすめたい。

世界の英語がどうなっているのか、英語は一種類だけではなく、国特有のなまりがある楽しさを知ってほしいから、すすめます。

座学で教わることのできない、本物の英語に触れあえる機会、そして15回分4人の先生から多くのことを教えてもらえるので、非常に楽しい授業だから、すすめたいです。

これらの学生の記述が示しているように、この授業を履修したことによって、英語に対して興味が増したり、英語を使うことに関する考え(learner beliefs)や態度に変化が生じたりすることが明らかになった。

#### 4. おわりに

2016年度に新設された科目「World Englishes」が、学生のこれからの英語学習を良い方向に変化させることが、アンケート調査の結果によって示された。

一方で、主に二点の問題点も浮かび上がってきた。一点目は、この科目が、英語能力において、4段階のレベルの一番下に分類されているため、クラス内では、英語能力の高いグループと低いグループに二分されたことである。このことが、授業に対する各グループの欲求不満を生むことも危惧される。二点目は、この科目は地球市民学科の選択科目なので、他学科の学生は履修しにくいということである。

地球市民学科で設定したレベルの難易度を変えることや、どの学科の学生でも履修できるような科目にすること、また希望者が多い場合は同様の科目を複数設置するなどの対策は、カリキュラムにおいて困難が予想される。しかしながら、英語を学習する日本人学生にとって、「World Englishes」という科目で学ぶ内容や、アジア、アフリカの人々と英語で会話する経験は、その後の英語学習に良い影響を与えることになる。すなわち、non-native speakersとしての自覚を持ちながら、コミュニケーションの手段としての英語を、積極的に使おうとする態度が養われる。このような、英語学習者にとっての利点を与えるために、どの学科であっても「World Englishes」という科目の履修を希望する学生に対しては、この科目を選択できるような対

策が望まれる。

### 参考文献

- Canagarajah, A. (1999). Interrogating the “Native Speaker Fallacy”: Non-Linguistic Roots, Non-Pedagogical Results. In Braine, G. (Ed.), *Non-Native Educators in English Language Teaching*. Mahwah: Lawrence Erlbaum.
- Crystal, D. (2003). *English as a global language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ellis, R. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Graddol, D. (2006). *English Next*. British Council.
- Jenkins, J. (2003). *World Englishes: A resource book for students*. London: Routledge.
- Kirkpatrick, A. (2007). *World Englishes: Implications for international communication and English language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kojima, C. (2005). A Study of Learners’ Attitudes toward World Englishes. *The Bulletin of the Graduate School of Education of Waseda University. Separate Volume*, 12(2), 181-190.
- Kojima, C. (2015) The Impact of Beliefs about Native-like English and World Englishes on Learning English. *English Usage and Style*. No.31 and 32 Issues, 45-59. JASEUS (The Japan Society of English Usage and Style)  
(日本英語表現学会)
- Mantle-Bromley, C. (1995). Positive attitudes and realistic beliefs: Links to proficiency. *The Modern Language Learning*, 79(3), 372-386.
- Norrish, J. (2008). Adopting English as a lingua franca. *Voices: Newsletter of IATEFL*, January-February 2008 issue 200, 4-5.

付録1

- 1 World Englishes を知っていますか。 はい いいえ  
知っている人は、知っていることをくわしく書いてください。
- 2 この World Englishes の科目をとりたいと思ったのはなぜですか。  
くわしく書いてください。
- 3 この World Englishes の科目で期待していること、やりたいことは何  
ですか。
- 4 私は、アメリカ人やイギリス人のようなネイティブの英語を使いた  
い。 はい いいえ  
その理由を書いてください。
- 5 私は、日本人なまりの英語を使いたくない。 はい いいえ  
その理由を書いてください。
- 6 自分の英語が日本人なまりだと思うと、自信をなくし、使いにくい。  
はい いいえ くわしく書いてください。
- 7 日本人が日本人なまりの英語を使うのは自然だから、私の英語が日  
本人なまりでも自信をもって使うべきだと思う。  
はい いいえ くわしく書いてください。
- 8 世界には、アメリカ英語やイギリス英語以外のさまざま英語がある  
ので、私たちはそういう英語を使うべきだ。 はい いいえ  
理由を書いてください。

